

伴走の舎

自然と「共に」、こどもと「共に」、地域と「共に」。園のあり方として、当園の根底に流れる考え方だ。共にあゆむ教育・保育を実践する人たちと「共に」あゆむ木造園舎。かつてボルノーは『教育的雰囲気』において、人間的生の根本的構えの一つである「住まうこと」の実現が、人間の健やかな成長にとって必要不可欠と語った。「住まうこと」とはその場所に適合していることだとも説いた。すべての人が安心して過ごせる場を保障せんとする本園の考え方は、ボルノーのそれに重なる。

【プロジェクトの概要】

幼保連携型認定こども園の建替えプロジェクト。2016年に、第一期工事として旧園舎からの建て替えを行い、その後2022年に「ほーる棟」、「子育て支援棟」、「てらす棟」の増築を行った。本応募はその増築部分である。

【木を見せる準耐火の園舎】

壁と取り合わない独立柱などに、210角の集成材を用いて燃えしろ設計とし、イ準耐火建築物ながら柱を露出させた。

仕上については、「以上児保育室」、「子育て支援室」、「こもれびほーる」など保育室系の床は奈良県産の30mm厚の檜材でを用いた。「おやねのひろば」の床は、兵庫県産の栗丸太の輪切りを敷き詰めたもので、保育者主導の自力建設で、園児の手を借りながら大人たちがつくり上げた。事例の見学に始まり、輪切り丸太の面取り、乾燥、オイル塗布、敷き並べ、モルタル埋め、洗い出し目地までの一連の工程が、保育者、保護者、地域の方々、こどもたちの自力建設で行われた。数か月にわたる工事期間中は、それ自体が園の日常生活の一部になった。手作りの空間は居心地のよい場に仕上がり、お迎え時の親子での読み聞かせや、毎週開催される地域の方が寄り集まる母里カフェなどに使われている。手作りの床は時



左上：園庭から北面を見る。／右上：あいだのおにわ。左がほーる棟、右が子育て支援棟、つきあたりが「おやねのひろば」。／左下：駐車場から南西面を見る。／右下：既存1歳児保育室と以上児保育室Aの南側に増築した「てらす棟」。奥が既存棟。



西側立面図 S=1/200



北側立面図 S=1/200



東側立面図 S=1/200



南側立面図 S=1/200

を経て落ち着きを増していく。経年変化を楽しめるのも丸太材の醍醐味であろう。

また、敷地内で伐採することになった既存樹は、乾燥の上、皮を剥いて「ほーる」や「おはなしのおへや」などに化粧柱として建てた。聞けば、角柱よりも丸太の方に触れるこどもたちが多いらしい。同じ木の建材で違いが出るということは、自然のままの形状であることが、こどもたちの触れたい気持ちにつながっているのかもしれない。

【おとなたちのことも考える】

これまで、保育所や認定こども園の設計では、子ども環境を優先するあまり、大人の環境づくりを後回しにすることが当然だった。でも、「そうじゃなくてもよいのでは」と、私たちはようやく気付き始めた。

「おやねのひろば」と名付けた玄関を園の中心に置き、保育者も保護者も近隣住民も、皆が気兼ねなく過ごせる場とした。ガスコンロとオープンを実装したキッチンを設置。お迎え時には、絵本を読む親子やママ友とのおしゃべりを楽しむ保護者の姿がある。近隣住民が自由に集う毎週開催されるカフェでは、コーヒーやサンドイッチが提供される。子育て世代と、子育て世代を応援する大人たちのためのサードプレイスだ。

【使用した木材】

- ・構造材 北欧産レッドウッド集成材
 - ・土台 中国九州地方産檜集成材
 - ・床丸太敷 兵庫県朝来市産栗材
- 構造材等が県外産なのは、ウッドショックと重なり、かつ単年度の国及び町の補助事業でもあり、年度内竣工を優先せざるを得ず、産地指定できなかったため。

【データ】

用途：幼保連携型認定こども園

工事種別：増築

構造規模：木造平屋建

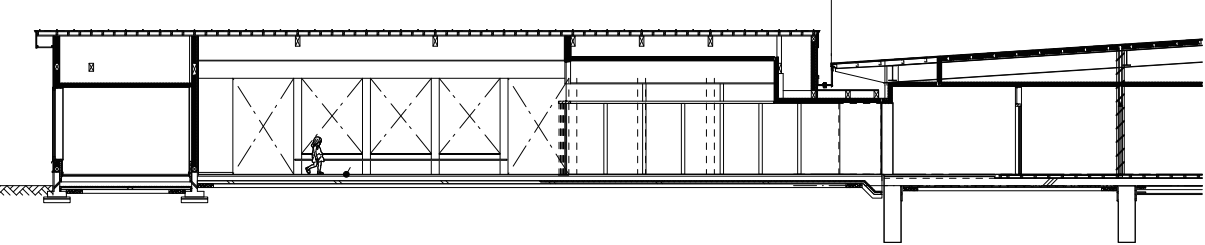
敷地面積：5895.96 m²

延床面積：1603.19 m²（内増築棟 634.28 m²）

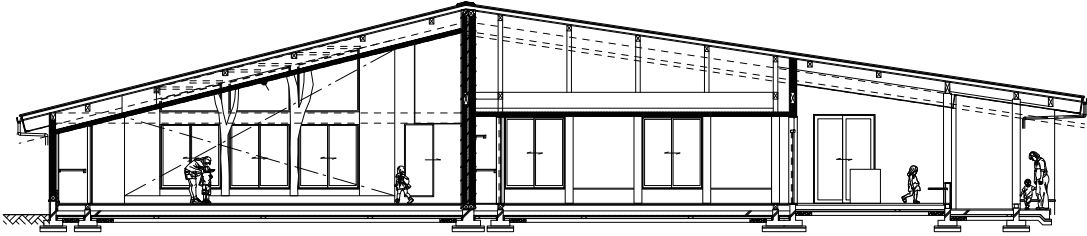
竣工：2022年3月



配置図兼平面図 S=1/200



東西断面図 S=1/200



南北断面図 S=1/200